

## お茶の水地理学会見学会

平山隆子

花曇りの空のもと、心地良い春の風を受けながら見学会は行われました。案内・ご指導は杉谷隆先生、渡辺真紀子先生、参加者20名。午前10時に府中駅に集合し、バスで「府中市郷土の森」へ移動しました。

郷土の森は、府中の歴史を見続けながら流れてきた多摩川のほとりにあります。広大な敷地に府中の歴史と文化、自然を融和させたいわば“府中の縮図”を表現した新しい総合博物館です。13ヘクタールの園内には、プラネタリウムを併設した博物館、市内から移築した復元建築物や茶室、市の花「梅」にちなんだ梅園、芝生広場、滝や池などの多目的公園が広がっています。今回は、その中心施設である博物館で主に府中の生い立ちについて学芸員の松田氏からお話を伺いました。

古生代から新生代第四紀更新世前期までの間、府中周辺は海底でした。多摩川の河原には、上総層群が露出し、二枚貝を中心とした52種類の貝化石が発見されています。その後陸化して、次第に府中の地形がつくられてきました。約50万年前の更新世中期には、多摩丘陵北西部から浅間山（府中市若松町）の北東方向に古相模川が流れていました。古相模川が運んだ御殿峠礫層は、多摩丘陵や浅間山に残り、当時、浅間山と多摩丘陵がひとつづきの地形であったことを証明しています。また、府中から見た多摩丘陵の山なみが水平なのは、当時の堆積面の名残りです。

府中の台地（武蔵野段丘と立川段丘）と低地は、更新世後期から完新世に多摩川によって形成されました。台地の上には富士山などからもたらされた多くの火山灰が積もり、関東ローム層となっています。その中には、約5万年前の箱根火山の噴火による東京軽石層（TP）や鹿児島湾の始良カルデラからもたらされた2万～2万2,000年前の始良Tn火山灰（AT）などもはさまれます。府中に人間が住み始めたのは、およそ3万年前の

ことで、ローム層中から彼らの使った石器類が出土しています。約2万年前を境に、気候の温暖化が進んで人々の生活様式も徐々に変わり、およそ1万2,000年前には土器がつくられ始め、縄文時代を迎えました。

地形学や地質学をまだ習っていなかったので、初めて聞く事柄も多く、とてもよい勉強になりました。博物館には化石や土器をはじめ、たくさんの出土品が展示されており、府中の生い立ちから現在の姿までよくわかりました。

芝生広場で各自自参のお弁当を食べた後、バスで国分寺にある「真姿の池湧水群」へ向いました。真姿の池湧水群は、昔から飲料水、農業用水源として用いられており、名水百選の1つでもありますが、最近では雨水が地下に浸透しにくくなり、地下水位が低下し、湧水が減少・枯渇しています。原因としては、道路がアスファルトで舗装され、住宅が密集するなど、表土が露出している面積が減少したからだと考えられています。そこで東京都と国分寺市では、涵養地域に降る雨水を地下浸透させる雨水浸透柵を設置しました。この方法はとても地道なものですが、いつか必ず湧水はよみがえると思われます。

バスを降り、国分寺崖線に沿って散策しながら真姿の池を訪ねてみたところ、少しずつ水が湧きあがってきており、水を汲みに人が絶え間なく来ていました。消毒薬漬けの水道水よりもこのような自然水の方がやはり体にも良いと思われるので、今までは開発・発展のみを行ってきた日本も、この辺で自然を見直す時期なのではとつくづく思いました。国分寺跡で小休憩の後、西国分寺駅へ向い、駅で解散となりました。初めての見学会参加でしたが、先生はじめ先輩の皆様と親しくお話しすることができて、有意義でとても楽しい見学会でした。

（4月18日 案内者：杉谷・渡辺会員）